

入選

テーマ：誰かのために、わたしができること 「勇気の魔法」

和歌山県・智辯学園和歌山高等学校2年 堀江風花

学生の私はちっぽけだ。大人にならなきや何もできない。早く大人になりたい。ずっとそう思っていた。そっあの日まで。

あれは桜舞い散る春の夕暮れだった。「今日は早く帰ってきなさい。」と母から言われていた私は、終礼が終わると教室を飛び出し、駅に向かった。駅のホームには家路を急ぐ学友がたくさんいた。向こう側から電車から降りてきたおばさんが歩いてきた。どこか辛そうで、今にも倒れそうだった。急いでいた私は、「きつと、大丈夫。」と自分に言い聞かせて通り過ぎようとした。ホームにはアナウンスが鳴り響いていた。でも「このままではダメだ。」心の中で何かが叫んだ。気付いたら回れ右をして「大丈夫ですか!？」と声をかけていた。おばあさんは、ただ「ごめんね。ごめんね。」と繰り返すだけだった。「私一人では無理だ」と思った私はとっさに周りに助けを求めた。幸い、学校の近くだったので、同じ学校の子はたくさんいた。でも、私の声に「手伝える事ありますか?」と答えてくれたのは小さな男の子と少しチャラけた大学生だけだった。駅員さん呼び、119番通報し、おばあさんにその場に座ってもらった。そして私たちは救急車が来るのをひたすら待った。「カシャ、カシャ」後ろの方で携帯のカメラの音がした。それも何度も何度も。その度、私は苛立った。救急車が到着した時に、走って見に行く人を見て、憤慨した。「誰か助けて。」と言う私の声には見向きもしなかったのに。誰かが苦しんでいる姿は、彼らにとっては珍しい見世物に過ぎないのか。救急隊員に引き継ぎ、私は、電車を待っていた。「倒れてた人見た?」「見た見た! キモすぎ。」そんな会話を耳にして、私は怒るといより悲しかった。

「人はみな、自分だけは死なないと思ってる。」こんな言葉を聞いたことがある。自分には関係ない。自分が倒れることはない。みんな

そう思っている。「関係ない」と言う呪いにかかっている。このままではだめだ。大切な誰かを失ってからでは遅いんだ。

あなたは知っていますか。目の前にいる誰かは、他の誰かの大切な人なんです。あなたの少しの勇気で、目の前の人だけじゃない。その人を想うたくさんの人を救えるんです。誰かが倒れているところに遭遇するなんてめったにないかもしれない。でもそれはあなたが、携帯で撮影するために遭遇したのではないんです。

きつと誰もが一度は「誰かの役に立ちたい」と思ったことがあるだろう。「スーパーマンになりたい。」そう思ったことはないですか。でも大人になるにつれて、だんだん自信がなくなってくる。毎日毎日、ダメ、ダメを繰り返されて、悪魔の呪文に取り憑かれて、私はダメな人間だと、自分で決めてしまっていますか。たくさん勉強したからこそ、「失敗したらどうしよう」と色んなことを考えてしまっていますか。

「関係ない」と知らんぷりするのは楽だ。だから私も一瞬そう思った。実際駅にいた多くの人は「私には関係ない。」と背けてしまった。でも、私は勇気を出して、回れ右した。そうして私にかかっていた呪いを解いた。

「関係ない」人々からそんな意識をなくしたい。私はまだ誰も助けられないかもしれない。でももう自分をちっぽけだなんて思わない。早く大人になりたいとも思わない。高校生の今、私にもできることがある。みんなにかかっている「関係ない」の呪いを解く、魔法使いになつてみせる。

人を助ける。それは勇気がいる事。でも誰にでもできる人生を変え魔法です。もしあなたが夢を持ってなく人生に迷いがあるなら、誰かを助けてみませんか。あなたの勇気で、あなたもあなたに助けられた人も、きつと未来が変わるはず。

家に帰ると母に叱られるかもしれない。でも私は今日、少し魔法を使える様になった。